

文・写真 垣井 清澄(大阪城公園生きもののいっぱいプロジェクト)

大阪城公園は緑の少ない大阪市内にあって、まとまった緑のある貴重な場所です。開園は、1931年で1964年に緑化100年宣言の記念公園となり、1967年からは森林公園として、緑が蓄積されて来ています。しかし、自然公園ではなく都市公園であるために生きものだけに配慮する事への困難さがあります。鳥類は豊かです。鳥にとっては、街の中に自然ばえとみられる樹木や植栽木の大樹が見られる緑の塊と濠の水があって、立ち寄るのに好適なのだと思います。一方で、林内には落ち葉も下草も少なく、裸の地面に木が生えているだけと言う場所が少なくなく、動植物の多くは普通に見られる種で外来種も多く見られます。それでも、見つけると嬉しい在来種や残したい環境もあります。梅林にはシロバナタンポポが見られますし、エノキの大樹がある場所はゴマダラチョウの棲家である。大阪城公園は、歴史遺産、観光の拠点であり、市民の憩いの空間であることから、自然公園の要素を加えることには意見の違いもあります。しかし、公園の大きさ、広さから、現在の公園の果たしている役割を損なうことなく、工夫して、良いところを残し、生きもののために良くして行きたいと思います。



大阪城公園自然観察会

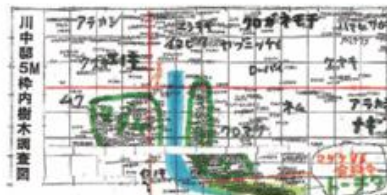


サトクダマキモドキ幼虫

文 川中 知子(今米緑地保全会代表)

写真 飛田 太一郎(同会幹事長)

生駒山系の樹林の様でもなく、よく似た高田直俊邸の約20倍の敷地で、里山風の街中の屋敷林である。古民家の白蟻対策のために搬出する以外は、邸内の落葉はブローし積み重ねたまま、植木屋好みの庭ではない。竹の野放図な広がりはやっと解消でき、アラカシ・イヌマキ・ウバメガシが多く、イスノキ・エノキ・イヌビワ・クロガネモチ等150種類以上あって、生駒山系には少ない海岸性の種もある。先般の台風による倒木はなく、すべての樹木を保全したく、2年前に近畿大学の田端先生の指導で、邸内を5m×5mの枠に区切り、樹高1.3m以上の樹木の位置図を作成した。現在、堀や建物を位置図に挿入するため再測をして作図を行い、同時に小木も視野に入れた将来の緑の保全対策の模索と研究中です。保全協会の皆さん、保全のお知恵とボランティアのご協力をお願い申し上げます。



川中邸5m枠内樹木調査図(一部)



南側は今米公園、植樹少なく奥の北側が川中邸



主屋正面アプローチ、ナンテン・マンリョウの小木群